

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

研究科セミナー

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第26回

「戦後の沖縄本島にみる沖縄地元民と米軍関係者の人的交流—『コンタクト・ゾーン』を契機として」

Dr. Christopher Ames (メリーランド大学ユニバーシティ・カレッジ准教授)

---

5月7日、グローバル・スタディーズ研究科の主催による連続セミナー「グローバル・ジャスティス」の第26回が行われ、講師にメリーランド大学ユニバーシティ・カレッジ准教授の Christopher Ames をお迎えして、「戦後の沖縄本島にみる沖縄地元民と米軍関係者の人的交流—『コンタクト・ゾーン』を契機として」というタイトルでお話しいただいた。人類学を専門とされている Ames 氏は、沖縄に暮らす米軍と地元住民の関係を、特に個人レベルでの交流に焦点を絞り、インタビューや参与観察を用いて研究されている。なお、講演は以下の流れで行われた為、当報告書もこれに従って作成した：1) コンタクト・ゾーンの説明；2) 歴史的背景；3) 先行研究；4) 変容する相互イメージ；5) 民俗学的視点からみた沖縄

#### 1) コンタクト・ゾーン

Ames 氏によれば、「コンタクト・ゾーン」とは、文学者メアリー・ルイズ・プラットが1992年の著書『帝国のまなざし』(*Imperial Eyes*) のなかで用いた概念であり、「植民地支配・異民族支配などによって人が文化間を移動した結果、力関係の大きく異なる人々が一時的、または長期に渡って共有する空間」のことである。コンタクト・ゾーンにみられる特徴の一つに、「従属的な集団が支配集団から伝達された事柄を材料として選択的に取り入れ、そして独自の工夫を加える現象」、すなわち、「トランスカルチュレーション」があるが、例えば、沖縄の代表的料理であるゴーヤ・チャンプルーにおいて、豚肉に代わる食材としてのランチョンミートの使用が戦後の沖縄で一般化する過程はこれに当てはまると Ames 氏は説明する。

#### 2) 歴史的背景

アメリカ合衆国と沖縄の関係史は江戸時代にまで遡ると Ames 氏は言う。事実、1853年、アメリカ海軍のペリー提督は日本来航に先立って沖縄（琉球）を訪れており、当時の琉球国王である尚泰王に謁見すると同時に沖縄初となる米軍基地の開設を行っている。また、日本政府が近代化政策を推し進めた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、出稼ぎ

や徴兵忌避などの理由から、沖縄からアメリカ（主にハワイ州及び西海岸）へ移住する人々がいたことは現在では広く知られている。1941年に始まる太平洋戦争中には、唯一、沖縄においてのみ地上戦が展開され、「鉄の暴風」と形容される激戦は多数の犠牲者を出した。太平洋戦争の終結に伴い琉球列島米軍政府による沖縄統治が始まるが、1940年代後半の東西冷戦の激化、とりわけ朝鮮戦争の勃発を受けて基地建設が進められた沖縄は、米軍にとって「太平洋の要石」としての役割を担うようになる。この間にも沖縄県民のあいだには軍政府の圧政及び米兵による日常的な人権侵害行為に対する不満が蓄積されていく。例えば、1970年のコザ暴動は、米軍人が地元住民を跳ねた交通事故が直接の契機であったが、その背景に長年には渡って深刻化した反米感情があったことは想像に難くない。暴動から2年後の1972年になって沖縄は日本に返還されたが、基地は県内に残されることが決定、基地撤去を望んだ住民の期待を裏切ることとなった。その後、1995年の米兵による少女強姦事件を機に県民のあいだに燻っていた反米感情が再び爆発、アメリカ軍基地の縮小・撤廃要求運動が展開された。これを受け、日米両政府は1997年、普天間飛行場の返還を含む基地移転案に合意するものの、移転先の選定が難航、現在に至るまで実現には至っていない。

### 3) 先行研究

Ames氏は、はじめに宮西香穂里（京都大学）による米軍兵士と沖縄女性の交際及び結婚についての研究に言及した。続いて、田中雅一（京都大学）がおこなった米軍基地内で定期的に催されるフェスティバルを対象とする研究について触れ、これを地元住民にみられるアンビバレンス—すなわち、基地の縮小・撤退を望みつつも、一方で、文化交流には積極的に参加すること—に着目するという点で大変興味深い研究であると述べた。次いで、富山一郎（同志社大学）が2000年に著した論文を紹介、富山が論文のなかで強調した「個人的な事と政治的な事は不可分である」という主張に賛同するとした。続けて、トルコにある米軍基地とその周辺のトルコ人社会との関係を調査したCharlotte Wolfの著作 *Garrison Community: A Study of an Overseas of American Military Colony*(1969)を重要な先行研究として挙げた氏は、同研究が、アメリカ人による米軍基地研究であること、そして基地問題をトランスナショナルな問題として分析したことの2点で画期的である、とつけ加えた。最後に、Ames氏は自身の博士論文である“Mired in History: Victimhood, Memory, and Ambivalence in Okinawa Prefecture, Japan” (2007)に言及した。沖縄県北谷町美浜にあった米軍基地の跡地に建設された商業施設「アメリカン・ビレッジ」を研究の対象としたものである。論文のなかで氏は、同商業施設を、沖縄が、理想化された古き良きアメリカのイメージを選択的に取り入れ、国際的な街づくりを実現した好例であると解釈、沖縄自身が、見られる沖縄から見返す沖縄へと変貌を遂げる過程を体現している、

と分析している。

#### 4) 変容する相互イメージ

まず、Ames氏は、沖縄県民がみたアメリカ人のイメージを、沖縄生まれの版画家である儀間比呂志の作品に焦点を当てることで検討した。戦時中の沖縄において、アメリカ兵は、日本軍のプロパガンダにより、「鬼」として描かれる事が多かった一方、彼らを「救済者」だと見なした地元住民も少なくなかった。自身がインタビューを行った沖縄在住の戦争体験者のなかにも、「戦時中に沖縄県民を見捨てた日本軍とは対照的に、米軍は積極的に食料を供給してくれた。」と話す者もいたと付け加えた。しかし、このような良いイメージが長続きすることはなく、沖縄住民のあいだには「性的な野蛮人」というアメリカ人のイメージが占領期から現在に至るまで支配的である。

次に、Ames氏は、アメリカ人が見た沖縄ないし沖縄に暮らす人々のイメージを四つ紹介した。沖縄占領期から現在まで、多くのアメリカ人が沖縄のことを「岩 (the rock)」と呼ぶ慣習があるが、これには退屈な場所という意味が込められているらしい。続いて、アメリカ人のなかには沖縄人女性のことを性的に魅力的な「オリエンタル・レディー」と考える者が存在していると話した氏は、自身のインタビューにおいても、「沖縄には海兵隊が好きな女性が多い。」と話す米軍が頻繁にいる事実に言及した。多くのアメリカ人が共通して持つ沖縄人のイメージの三つめとして「小さくて可哀想な沖縄人」がある。例えば、1950年代に米軍の妻として沖縄に滞在した経験を持つマリアン・メリットの著作 *Is Like Typhoon: Okinawa and the Far East* においてもこのような沖縄人表象は顕著であるとの事。四つめのイメージは、「沖縄は南国のパラダイス」というもので、氏曰く、このイメージは沖縄の本土復帰後に付与されたものであり、以来、沖縄配属を希望する米兵達のモチベーションのひとつになっているのだそうだ。ただ、ここで紹介されたイメージはあくまでも傾向であり、沖縄住民・アメリカ人を問わず、相互に対してアンビバレントな感情を持つ者も多い、とAmes氏は指摘した。

#### 5) 民俗学的視点からみた沖縄

次に、Ames氏は、自身の研究テーマである沖縄に暮らすアメリカ人と地元住民との個人レベルでの交流についての調査報告を行った。研究の方法論としてはインタビューを採用、結果はジェンダー別に分類された。まず、日米男性同士の友情であるが、例えば、米軍司令官と沖縄の地元住民というような関係においても、政治と個人の友情関係は別物だ、とする傾向があり、ダイビングやバンド演奏を楽しむ等、余暇を共に過ごす人達は少なくないのだそうだ。続いて、沖縄人男性とアメリカ人女性の交流であるが、米軍関係者のほとんどが男性であるという事実からも想像出来るように、何らかの交流（とくに恋愛や結婚）があるケースは非常に珍しいようで、10年にわたり沖縄に滞在したAmes氏でも、沖縄人

男性とアメリカ人女性の夫婦はたった1組しか知らないとの事である。女性同士の関係では、沖縄人のメイドとアメリカ人の奥様というパターンの他にも、基地外にある教会での触れ合いや、近年ではNPO活動を通じて交流するケースも増えている。続いて、沖縄人女性とアメリカ人男性の交流であるが、これが最も多いケースである。第二次世界大戦中や戦後直後のアメリカにおいては、日本人がアメリカ人の配偶者になる事は厳しく制限されていたが、近年では増加傾向にある。ただし、沖縄の伝統的な価値観に基づいて、家族から結婚を反対されるケースも未だにあると Ames 氏は指摘する。同様に、米兵のなかにも沖縄女性との交際に関して懐疑的である者も存在、例えば、あるアメリカ軍人は「沖縄人女性は、黒人である自分を連れて歩きたいだけではないのでは？」とインタビューで答えている。最後に、日本人とアメリカ人のあいだに同性愛が存在する可能性について触れた氏は、米軍内では、いわゆる“Don't Ask Don't Tell”ポリシーを長年に渡って採用されたせいで、実情を探るのはかなり困難であると説明した。

講演の最後に Ames 氏は、ここ数年の円高の影響もあり日米間での貧富の差が縮小しているという現実について触れた。続けて、退役軍人のなかには平和運動活動家になった者もいるし、高度経済成長を遂げた日本に対する尊敬も米国内で顕著であると話した氏は、基地問題は決して簡単な問題では無いが、今後両国の関係が改善に向かうことを願うと述べ、講演を締めくくった。